



発行責任者：秦野市教育研究所長 杉山 哲也
発行日：平成26年3月13日
秦野市教育研究所
住所：秦野市桜町1-3-2
電話：0463-81-2125
e-mail：k-kenkyu@city.hadano.kanagawa.jp
URL：http://www.city.hadano.kanagawa.jp/
k-kenkyu/kenkyu.html

はだのっ子アワード表彰式 初のトリプルクラウン受賞者が出る！

平成25年12月21日（土）、秦野市立本町公民館大会議室で7回目となる「はだのっ子アワード表彰式」を開催しました。「はだのっ子アワード」は、秦野の自然、風土、産業、伝統、文化などの地域資源を生かした学習及び体験における子どもたちの努力を褒め称え、ふるさと秦野を愛する子どもたちをはぐくむために行われているものです。

今年度の受賞者は、ふるさと秦野検定部門33名、文芸部門25名、体験活動部門7名、合計65名でした。



秦野産ヒノキ材の表彰楯をもらい喜ぶ受賞者と市長



一人ひとり表彰楯を市長から受け取る

ふるさと秦野検定部門は7月に行われたふるさと秦野検定1級の合格者が表彰されます。文芸部門は、本市で行われた小・中学生を対象とするコンクール、展示会等で特に優秀な成績を収めた人を表彰するもので、今年度は夕暮記念子ども短歌大会、子どもの市展（美術・書道・写真）、防犯ポスター、交通安全ポスター、環境ポスター、環境標語コンクールが対象でした。体験活動部門は体験のマップに沿って、秦野市の各地区の自然や史跡・文化財を訪れるもので、本町・南・東・北・大根鶴巻・西・上の7地区の内、3地区以上で活動した人が対象となります。体験部門、全7地区で活動したことを認定された人はグランドスラムとして表彰されます。今年度は3名が表彰されました。

この3部門全てにおいて、はだのっ子アワードで表彰された人は、トリプルクラウンとしても表彰されます。今回、はだのっ子アワード表彰始めて以来、初めてとなるトリプルクラウン受賞者が出ました。受賞者には、秦野産ヒノキ材でできたオリジナル表彰楯が贈られました。

ふるさと秦野検定1級合格者が増えたことに伴い、はだのっ子アワード受賞者も増えました。秦野を愛し、親しんでいる姿を見ることができました。毎年、年度始めには、はだのっ子アワードについてのお知らせを子どもたちに配付し、周知しています。この活動をきっかけとして、さらに多くの子どもたちに郷土を大切にすることを抱いてほしいです。



国際理解教育研修会 神奈川県立国際言語文化アカデミア

准教授 マルセル・ヴァン・アメルズフォート 氏 / 講師 ジョージ・クマザワ 氏

「英語を使いたい」と思えるような状況づくりを！

平成25年11月26日(火)に秦野市立渋沢公民館大会議室で、国際理解教育研修会を開催しました。参加者は、小学校の教員21名、中学校の教員8名。講師には、神奈川県立国際言語文化アカデミアの准教授、マルセル・ヴァン・アメルズフォート氏、講師ジョージ・クマザワ氏をお迎えしました。



「チョコの味見」も大切な職業です

今回の研修は県立国際言語文化アカデミア研修講座を利用したものでした。マルチメディアを取り入れて、子どもたちの集中力を維持しながら、コミュニケーション能力を向上させる方法について理解を深めるとともに、デジタル教材・教具を活用した授業に役立つ英語表現等を紹介していただきました。

デジタル教材で子どもの心をつかむ

第1部では、子どもたちの知的好奇心を満たしながら、英語をどんどん話したくなる仕掛けとして First person to say “20” Game が紹介されました。ご存知のように、1から20まで順に数えていくゲームで、数えてもいいのは1～3個の数です。最終的に20を言えた人が勝ちですが、実はこのゲーム、必勝法があるのです！画面に数字を映しながら、言われた数字を○で囲んでいくやり方だと、順番に当たっていない子どもも必死で数えます。そして何人かの子どもたちが、その必勝法を導き出すかもしれません。デジタルだと、数字を大きくしたり、逆から数えたりと様々な方法をとることができ、学び方のバリエーションも広がります。

アルファベットや単語のフラッシュカードでも、絵で導入したり、最初の文字だけ映して思い出すヒント

にしたりするなど、工夫ができそうです。また他にも画像を活用したアクティビティが紹介されました。

ここでのポイントは、待っている子どもたちにも、学びたい、参加したい状況を作ることです。またアクティビティに参加するために、英語を使わなければならない状況をつくり、使いたくなる気持ちを高めることです。ICTを活用することで、意味のあるやりとりが生まれ、子どもたちを現実の世界とつないでくれることを、先生方に再認識していただけたのではないのでしょうか。

“No”ではなく“Nice try”を使おう！

第2部では、クラスルームイングリッシュについてのお話がありました。たとえ子どもたちの答えが違っても“**No.**”ではなく、“**Nice try!**” “**Interesting!**”のような声掛けをすることが大切、という講師の先生の言葉が印象的でした。



子どもたちの気持ちになって講義を受けます

また“**What do you want to be?**”の教材として、世界の子どもの人気職業や世界中の珍しい職業、リアルな職業を紹介し、子どもたちに楽しみながらQ&Aを促す紹介がありました。Private Island Caretaker (無人島の管理人)という職業があるなんて・・・と一同ビックリ！

小学校、中学校ともに参加した先生方の100%が、今回の講座は「大変参考になった、参考になった」とアンケートにお答えいただいております。先生方のご意見を今後の研修講座の参考にさせていただきます。

なお毎年4月に国際言語文化アカデミアからは、研修講座案内の冊子が各小中学校に配布されています。ぜひ出前講座、出前授業をご利用ください。

理科教育研修講座「授業で活用できる科学実験のアイデア」

講師：JAXA宇宙教育センターアドバイザー

KU-MA子ども・宇宙・未来の会 副会長 遠藤 純夫 氏

「飛んだ!」「浮いた!」「進んだ!」

平成26年1月29日(水)に秦野市表丹沢野外活動センターの活動室で、平成25年度理科教育研修講座を開催しました。参加者は、市内小中学校の教員23名でした。講師にJAXA宇宙教育センターアドバイザー、KU-MA子ども・宇宙・未来の会副会長の遠藤純夫氏をお迎えして行いました。

最初に、子どもの好奇心と科学における学びについてのお話がありました。その後、「授業で活用できる科学実験のアイデア」という研修テーマで、3つの実技研修を行いました。



「こんな簡単に揚がるんだ!」

(1) スチロール凼

最初、発泡スチロールペーパーをそっと手から放して、滑空の仕組みを見せてくださいました。紙のように薄くした発泡スチロールを使うことで、重さと風の抵抗の関係に参加者を引き込んでいきました。

凼揚げの原理についても、具体的な説明がありました。「糸は凼の真ん中に付けてはいけません。中心より少し上に付けることで、凼の下側の面積が大きくなって、より風を受けます。逆に、凼の下側は重くもなり、下側から凼が下がります。だから、糸を引くと上がるんですよ。」そして、ちょっと糸を引いたり、少し歩いたりするだけで、凼が揚がりました。自然に参加者の先生方が活動室を連なって歩きはじめました。

(2) ポンポン船

蒸気と真空の作用により前後しながら動くポンポン船。その構造の説明の後、より簡単に作る方法を実演していただきました。船のエンジンとなる部分には曲げやすいアルミ管を使うなど、子どもと一緒に作る時

の視点で、準備することの大切さを実感しました。「どうやったらもっと速く進むのだろう?」と、先生方も夢中になる姿が見られました。



「大人がやっても楽しい!」

(3) スポイトロケット

最後に、長年の教材研究により生み出されたスポイトロケットを紹介していただきました。「本物のロケットと原理は同じ」という説明があり、ロケットが円滑に発射できるように発射台の接続部分が工夫されていました。お土産にこの材料をいただき、わくわくしながら先生方は会場を後にしました。

「子どもにも体験させたい、という思いがますます強くなりました。」「手頃な教材をさがすのがなかなか難しいので、紹介していただけてありがたいです。」「理論も一緒に話していただけたので、大いに参考になりました。」といった感想が数多くありました。



仕組みから教えてくださいました

防災教育研修講座 講師：宮崎 賢哉 氏

防災教育コンサルタント / 社会福祉士 災害救援ボランティア推進委員会主任

すぐ使える防災教育！「防災教育のすゝめ」
ー「できない」って言うな。やれば、絶対できるからー
そんな意気込みで取り組んでほしい 講師スライドより

平成26年2月4日（火）に秦野市保健福祉センターで、防災教育研修講座を開催しました。参加者は、市内外幼小中学校の教員37名でした。講師には、教育研究所が今年度参加している「防災教育チャレンジプラン」事務局、防災教育コンサルタントとしてご活躍中の宮崎賢哉氏をお迎えしました。講義の前半は、防災教育とその年間指導計画の必要性を、後半は、防災教育の実践例を紹介していただきました。

<できるまで繰り返しが必要！>

まず、後出しじゃんけんをしました。普通の後出しじゃんけんで、続けて勝つことはそれほど難しいことではありません。テンポが速くてもある程度は可能です。しかし、後出しじゃんけんで続けざまに負けるとなると、突然、難しくなります。どういうことでしょうか。「分かっている、できない。これは防災と同じです。」と宮崎さんはおっしゃいました。参加者は、普段できないことは、災害時にもできないということをご実感いただき、防災教育も繰り返す必要があることをご実感いただきました。



「防災教育も繰り返す必要があります」

<年間指導計画の必要性>

- ①□ 理想と現実を冷静に区別し実行可能な計画的教育を行うため
- ②□ 学習成果と目標行動を具体的に結びつけるため
- ③□ ゴールを明らかにすることで取り組みを前進させるため

これらを明示し、必要性を確認するとともに、教育研究所の幼小中一貫防災教育研究部会で検討中の年間

指導計画例づくりを後押しして下さる内容でした。部会では、各学校の年間計画の土台となるような具体的な例があると、参考にしやすいのではないかと考えています。



何のための教材や年間計画かをはっきりさせよう

<これだけは押さえておきたい教材>

すぐに使える防災教材として講師の先生が選んだものを紹介してくださいました。研究紀要で紹介し、先生方がすでに取り組んでいる教材もありましたが、改めて紹介いただいたことで、実践していこうという先生方への啓発になっていました。「教材・プログラムは、何を学ばせるために使うのかはっきりさせましょう。」という講師の言葉からも分かるように、何のための活動なのか学習目標を明確にすることで、防災教育がめざす力の定着を図ります。

<最後に>

阪神・淡路大震災後に子どもが描いた絵を見せてくださいました。崩れた建物の下敷きになっている母において、子どもが振り返り、泣きながら父と避難している場面です。言葉では伝えられない悲しい絵です。「後悔しないために、“災害と向き合う勇氣” “結果を変えていく勇氣” を持とう」「今は失敗してもいい。“その時”に命が守れれば、それでいい」というメッセージが印象に残りました。完璧な防災教育はありませんが、試行錯誤しながらも、子どもの命を守るために実践を積み重ねていかなければなりません。昨年度、教育研究所で刊行した研究紀要「子どもの命を守る防災教育」（全職員へ配付）をぜひもう一度手にとってください。そして、新年度の計画に役立てていただければと思います。